

水彩 Technique。



メディウム！

水彩でも油絵のような技法を駆使したいというアーティストが多い。ホルベインは新たに11種類の高品質な水彩用メディウムを発表します。絵具の透明度を高めたり、にじみを抑えたり、画面にきらめきを与えたり、紙のはじきを抑えたり、白抜きをしたり、部分をマスキングをしたり、どちらかといえば保守的なイメージの水彩が変わっていくはずです。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市土小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

佐藤時啓

鷹見明彦 文

光の刻印画 からバスカメラまで



セルフ・ポートレート(1988年)。鉄の彫刻から、ペンライトを使って行為の痕跡をフィルムに焼き付ける作品を制作するようになっていた



1987

「ひと月かけてつくる立体よりも、30分間、光でドローイングした残像のほうが、行為性が際立つように思えました」

Untitled 1987
ゼラチン・シルバー・プリント
28×35.6cm 国際交流基金蔵

土曜日の昼下がり、銀座近くのバスターミナルに、あるツアーの参加者たちが集まっていた。予定時刻になると、運転席以外の窓をすべて暗幕で遮蔽した1台のバスがやってくる。暗室となった座席に座ってエンジンがかかると、車窓に取り付けられたレンズの穴が開かれる。「サイトシーイングバスカメラプロジェクト」体験ツアーの始まりだ。

移動するカメラ・オブスクラ(暗箱カメラ)によって、原初的な映像体験のコンダクターを務める作家は、山形県酒田市に生まれ育った。

「中学、高校は、70年代の半ばの学園紛争後の嵐の後で、バレーボールや美術の部活をやっていました。美術が好きになったのは、中学の美術の授業で、木彫りでつくった人の頭部の作品をほめられたのがきっかけです」。

やがてマイケルやブルデルデスピオなどの彫刻を知り、憧れて東京の美術予備校の講習会に行つて、美大の彫刻科をめざした。1

「Photo-Respirationシリーズ」より
 “ #283 Dojunkai Apartmenthouse ”
 1996
 ゼラチン・シルバー・プリント、トランスペアレンシー 96×120cm
 「さようなら同潤会代官山アパート展 『再生と記憶』同潤会代官山アパート（東京、1996）で制作、展示



1996 「明るいときにも制作ができないかと考えて、手鏡で陽光を反射する方法を思いつきました」

1977年、東京芸術大学の彫刻科に入学。

「大学では、イタリアのマンズーヤマリニのような具象彫刻を目標にしましたが、多摩美から大学院に来た先輩に連れられて画廊めぐりをするうちに、大学と外の世界の違いを知りました。」

ミマル・アートやプライマリー・ストラクチャーズ、もの派などに惹かれたが、リチャード・セラの作品に出会って衝撃を受けて、鉄を使うようになった。

「セラのように重厚な物質感を強調するのではなく、ひたすら鉄板を叩きつづらした細い鉄の棒の溶接をくり返して、行為自体が形になった作品をつくりました。」

80年代の半ばまでは、鉄の彫刻に火や水、土、植物などを組み合わせたインスタレーションを様々な環境に設置する時期があった。

《Untitled》(1987)は、ペンライトの光跡を長時間露光で撮り込んだ作品の初期の一点。「左側に写つ



ワンダリングカメラ プロジェクト 2000 -
 ギャラリーGANでの展示(2001年) 撮影=桜井ただひさ

ているのは、鉄棒を溶接した彫刻ですが、右側は、その形をペンライトでなぞった行為の跡です。」

「鉄の彫刻も、素材に身体を働きかける行為に関心があったので、行為の跡が純化されて観えるこの方法は、より行為性を際立たせるように思えたのです。ひと月かけてつ

サイトシーイングバスカメラ プロジェクト vol.3
 2005年3月12日
 東京・銀座周辺
 上 バスカメラの車内
 下 バスカメラ
 暗箱カメラにした路線バスを東京・八重洲の発着場から1時間おきに8便運行。丸の内～東京駅～皇居前～日比谷～有楽町のコースを巡回した



2005

「カメラ・オブスクラ 暗箱カメラ」という原始的な現象に身体ごと加わることから、代替できない映像体験の可能性が生まれます」

くる立体よりも、30分間、ペンライトを持って空間に直接ドローイングした残像のほうだ」。

インスタレーションや環境のなかでの展示は、写真にしか残らない経験や、友人が手に入れた8×10の中古カメラの暗幕を覗いたときに映り込んだ逆さの映像のクリアースも、表現の媒体を、写真に横飛びさせる「動機」になった。

大学の地下室やビルの階段といった匿名的な場所を選んで、その場と時間を行為の光跡で充たした大型モノクローム写真による連作が制作されていた。「撮影時の自分には見えない残像へのイマジネーションとフィルムに定着された像の落差には、新鮮なりアリエー」がありました」。

78年には、芸大に写真センターができて、学生が設備を使えるようになっていたが、86年に同センターの助手になった。ペンライトの作品は、現代写真としても注目された。「Photo-Respiration」シリーズより

《#283 Dojunkai Apartmenthouse》

（1996）は、手鏡の反射光を使った多くの作品のうち的一点。「ライト・ペインティングの作品は、夜や地下室のような遮光された場所で撮影しましたが、明るいときにも制作できないかと考えて、太陽光を反射する手鏡で、動いた位置を光点として焼き付ける方法を思いつきました」。

「ペンライトのときは、カメラに対して動くときに建物のタイルの線などを位置の目安にしましたが、鏡の場合は、離れた距離だとレンズに光が届いたかどうかわかりにくいので、カメラの周囲に反射テープを張って確認します」。

「コートラルな場所が始まった写真による作品の制作だったが、手鏡を使うころには、社会や歴史を背景に、意味を持つ風景の作品に取り組んでいた。「すでに取り壊され再開された代官山の同潤会アパートもそうですが、写真の作品をつくりだしたのがパブルと、それが

さとう・ときひろ 1957年山形県生まれ。81年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。83年同大学院修士課程修了。93年タイムラー・アート・スカラシップでフランスに滞在。94年文化庁在外研修員としてイギリスに滞在。99年第9回パンクラデシュ・ビエンナーレ優秀賞。2005年文部科学省グランドでニューヨークに滞在。現在、東京芸術大学先端表現科助教授。

主な個展に1982年ときわ画廊(東京) 83,88年ルナミ画廊(東京) 93年アジアン美術館(フランス) スパイラルガーデン(東京) 96,99,2001,05年ギャラリーGAN(東京) 98,00年レスリー・トントンコノ・ギャラリー(ニューヨーク) 99年酒田市美術館(山形) 03年クレーブランド美術館(アメリカ) 04年山口芸術情報センター(山口) 埼玉県立近代美術館、05年シカゴ美術館(アメリカ)など。

主なグループ展は、81年「第15回現代日本美術展(東京都美術館、埼玉県立近代美術館賞、いわき市立美術館賞ほかを受賞)」90年「東川国際写真フェスティバル(北海道、新人賞受賞)」日本の現代写真・12の指標(東京都写真美術館/パリ巡回) 94年「液晶未来(イギリスほか巡回) 95年「灰塚アースワークスプロジェクト(広島) 95-96年「空間・時間・記憶」(原美術館、東京/ロサンゼルス・カウンティ美術館ほか巡回) 96年「光へのまなざし(いわき市立美術館、福島) 97年「第6回ハバナ・ビエンナーレ(キューバ) 00年「第1回越後妻有トリエンナーレ(新潟) 03年「日本写真史展(ヒューストン美術館/クレーブランド美術館、アメリカ)など。



「サイトシーイングバスカメラ プロジェクトvol.3 銀座」にて。左の黄色い円は、窓の5か所に取り付けられたピンホールレンズの穴。背後はスクリーン(車内の映像は前ページ)。これまで秋田県犬湯村(2004年10月)、茨城県取手市(2004年12月)、東京・銀座(2005年3月)の3回が実施された

崩壊する時期と重なったこともあって、スクラップ・アンド・ビルドを加速した東京の臨海副都心や、その半面で廃墟となっていく地方の炭鉱、ダムなどがモチーフになったのは必然でした。

原子力発電所やキューバの史跡、故郷の酒田に残る庄内米の倉庫跡などへロケーションは広がった。展示も大型プリントに加えて、トランスペアレncyにより透過光やバックライトで見せる形式が増えた。

「ワンダリングカメラ プロジェクト」(2000)は、上部にレンズを付けた小屋型のカメラ・オブスクラを車で引いて、各地を巡り、出会った人々にピンホールの映像を直接体験してもらったプロジェクト。

「建物や部屋をピンホール・カメラにする試みは、美術館のワークショップなどでもやっていました。それを街や公共の場に持ち出したいと思ったのは、フランスの田舎町で滞在制作した際の人々との関係や、パンクラデシュに行ったときに人か

崩壊する時期と重なったこともあって、スクラップ・アンド・ビルドを加速した東京の臨海副都心や、その半面で廃墟となっていく地方の炭鉱、ダムなどがモチーフになったのは必然でした。

原子力発電所やキューバの史跡、故郷の酒田に残る庄内米の倉庫跡などへロケーションは広がった。展示も大型プリントに加えて、トランスペアレncyにより透過光やバックライトで見せる形式が増えた。

「ワンダリングカメラ プロジェクト」(2000)は、上部にレンズを付けた小屋型のカメラ・オブスクラを車で引いて、各地を巡り、出会った人々にピンホールの映像を直接体験してもらったプロジェクト。

「建物や部屋をピンホール・カメラにする試みは、美術館のワークショップなどでもやっていました。それを街や公共の場に持ち出したいと思ったのは、フランスの田舎町で滞在制作した際の人々との関係や、パンクラデシュに行ったときに人か

車の幌付きの座席をカメラ・オブスクラにして街を走って見たのが、きっかけになりました。

2004年から始めた「サイトシーイングバスカメラ プロジェクト」では、バスをそのまま暗箱カメラにして運行し、乗客はリアルタイムでピンホール映像となって映り込む外部の風景を体験する。

バスが走りだすと、通路に吊されたスクリーンに窓のレンズから投影した逆さまの街も動きはじめ

る。丸の内、東京駅、皇居前、有楽町……いつも通り過ぎていた風景が、バスの走行とともに細部まで生々しく映り込んで息づく……時間になると、20分ほどの乗車時間は、夢現の境界に滑り込んで漂うような体感をこころの壁に拡げて、終わった。

3月12日、東京・銀座と、3月15日、神田にて取材

たかみ・あきひこ(美術評論家)